少年少女のための

現代日本文学全集

15

佐藤春夫集
室生犀生

責任編集

久松潜一
伊藤整
福田清人

少年少女のための現代日本文学全集 15

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集 15

佐藤春夫
室生犀星
集

定価 二五〇円

昭和三十年九月三十日 初版発行
昭和三十三年八月十日 再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 千代田区神田神保町二ノ二一

発行所 東西文明社

中興堂
製本石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の、真実や美をするどくみつめて、その作品にはっきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることは、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしてくれておりますので、きっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるでありましょう。

編集者　久松潜一
　　伊藤整
　　福田清人

★本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた註です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

佐藤春夫集もくじ

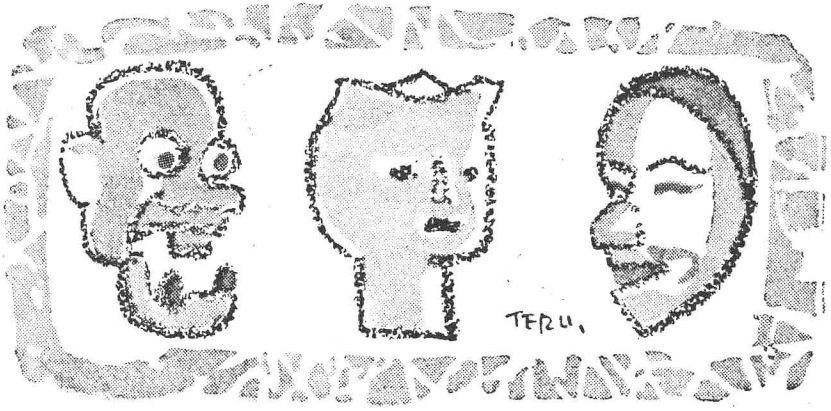
佐藤春夫詩集……七
西班牙犬の家……一四
天狗にさらわれた娘の話……三三
星……二六
少年……五八
最もよき夕……六五
蝗の大旅行……八六
私の父が狸と格闘した話……九一
一ばん古い記憶……九八
たからもの……一〇一
解説　富永次郎……一〇九

写真撮影　浜谷　浩

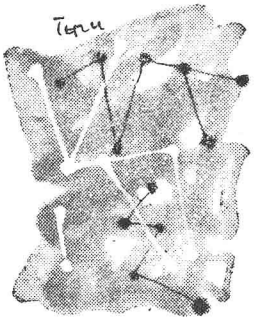
室生犀星集もくじ

室生犀星詩集……一二九
幼年時代……一二八
蝶……一八〇
歳旦……二〇六
蟬を考える……二〇九
羽蟻……二一一
自動車の本……二一三
犬の神経……二一五
日本の庭……二一六
懸巣……二二〇
人真似鳥……二二二
解説　富永次郎……二二四

そうてい　青山龍水
カット　山本耀也



佐藤春夫集



佐藤春夫詩集

海の若者

若者は海で生まれた。
風をはらんで帆の乳房で育った。
すばらしく巨くなった。

ある日　海へ出て
かれは　もう　帰らない。
もしかするとあのどっしりした足どりで
海へ大またにあゆみこんだのだ。
とり残された者どもは
泣いて小さな墓をたてた。

私の柱時計

ある日、私はある場末の時計屋で古びた風変わりな時計を一つ買って来た。かべにかけてから三時間以上もそれをながめて、私は遊んだ。電燈がついてから、次のようなものを書いた——

文字は喜のようにあざやかな金
文字板は死のようにまっ黒
ぐるりは花と葡萄葉とのかざり
振子といえばたったひとふさの
風にゆれるあまい葡萄の実

このよい柱時計の細工人は
無名でこそあったがきっと
エピキュラスほどの賢者だった
美しい教えはつつましいから
人に知られずに三十年の間
場末の店で塵まみれだった
チクタクチクタクチクタク

伊都満譚詩

糸満は琉球南方の一海村なり。その民は勇敢にしてはなはだ海洋を愛しこのんで扁舟をもて遠洋にうかぶとや。われ故郷に帰りて南海の浜に居し、一夕、怒濤を聞きて興趣を覚ゆ。ふとリヒャルト・デエメルに「海の鐘」の歌ありしを思いいで筆をとりて試みにこの譚詩をつくる。

なんじ童たち
朝夕の目ざめに
潮騒の音を
海とや思うらん。

わたつ海の底に
深く鳴りいずる
世にもいみじかる
鐘のひびきは、

こぎいでて水の
心臓にふるる時
選ばれし舟子ぞ
命をかけて聞く。

波ぞ美しき。波ぞ
勇ましき。波ぞ
おそろしき。おそろしき
美しき、可愛しき。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おそろしき時いとど
可愛しや、波。命。
我は勇魚となりぬ
波のまにまに。

友や、七人
この日波に飲まれつ、
勇魚なるわが真上に
星一つ見えきて、

雲さけて、月はだら
聞け、鳴りいでぬ、鐘
海の鐘。生きて我
美しき身ぶるいす。

言いよりてささやく
海の胸の鐘ぞも。
まごころを明かしぬ
底なき底より。

七人の友に
われは勝ちつつ
海はこの日より
われに身を任せつ。

「海の夫、颶風の
友、人の勇魚」
かくよばれてわが
髪は白くなりつ。

常若の海は
白き髪をこのまず、
わが骸は今ぞ
陸の妻にまかす。

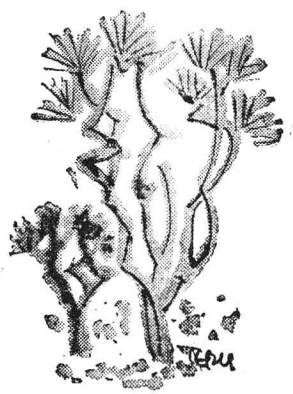
我ぞ聞きし。むかし。
海の底ふかく
鳴りいでてひびく
いみじかるかの鐘のひびき。

よしや高鳴りて
胸をとどろかすとも、
知れ、潮騒はただ
たわれ女のたわれ唄。

子ら、友に勝て
風に勝て、海をめとれ、
深なさけいみじき
海をその鐘に聞け。

くつがえりたる刳舟は
汝が腕にいだけ。
二つなき海の鐘は
命かけて聞け。

わが教えこそは、よき
童たちにのこす。
骸は、いたずらに
陸の妻にまかす。



花の徳

空をぬぐえる雲はやく
あたらしき野のあけぼのに
かがやきにおう花あわれ
めでたきままに言とわん。

尾の上の松をくだきたる
よべのあらしをしのぎ来て
くだけて折れぬ汝がちから
いかにいずこに得たりけん。

神しろしめすばかりとや
はなにこやかに笑めるのみ
ふかきこころを香にこめて
いわぬは花の徳ならん。

望郷曲

ふるさとはみんなみの国
みな月の青葉ににおい
かがやかに照る日のもとに
たちばなの花さきしかげ
われをよぶつぶらひとみの
ミニヨンにまがいしひとは
早く世にあらずなりぬる。

さすらいの二十年ののち
海近き丘のふもとに
みいでたる杉の木の間は
おくつきに照る日もくらし
みんなみの国にはあれど
ミニヨンにまがいしひとは
早く世にあらずなりぬる。

渚の蝶

（大磯海岸所見口吟）

蝶よ　小さな蝶よ
晴れた渚の蝶よ
一むれの蝶よ
秋の胡蝶よ
野べには草の花も多いのに
白くわき返る浪の泡沫にたわむれて黄なる蝶よ
へんぽんと、低くそなたは何を求めてそこにいるか。
水平線を望んでさまようのか
しぶきを帯びてそなたの翅はあまりにもろい。
しかしそなたはあわれに美しい。
こころ切なく不思議に美しい。

きのう温室の窓に
そなたのおなじうからを見かけたが
きょうのそなたのように美しくはなかった。
蝶よ　渚の蝶よ
さわやかな蝶よ
不思議な蝶よ

望郷五月歌

塵まみれなる街路樹に
あわれなる五月来にけり
石だたみ都大路をあゆみつつ
恋しきやなにぞわが古郷
あさもよし紀の国の
牟婁の海山
夏みかんたわわに実り
橘の花なくなべに
とよもして鳴くほととぎす
心してな散らしそかのよき花を
朝霧か若かりし日の
わが夢ぞ
そこに狭霧らう
朝雲か望郷の
わが心こそ
そこにいさよえ
空青し心青し海青し
日はかがやかに
南国の五月晴こそゆたかなれ
心も軽くうれしきに

海の原見遙かさんと
のぼり行く山べの道は
杉 檜 樟の芽ぶきの
花よりもいみじくにおい
かぐわしき木の香薫じて
のぼり行く路いくまがり
しずかにも登るけむりの
見まがうや香炉のけむり
山樵がすいのこしたる
鄙ぶりの山のたばこの
椿の葉こげて落ちたり
古の帝王たちも通わせし
尾の上の道は果てを無み
ただつれづれに
通うべききわにあらねば
目を上げてただに望みて
いそのかみふるきむかしをしのびつつ
そぞろにも山を下りぬ
歌まくら塵の世をはなれ小島に

立ちさわぐ波もや見んと
たどり行く荒磯石原
丹塗舟かげこきあたり
若者のいこえるあらば
海の幸鯨捕る船の話も聞くべかり
かつは問え
浦の浜木綿幾重なすあたりいずくと
いざさらば
心ゆくきょうのかたみに
荒海の八重の潮路を運ばれて
流れよる千種百種
貝がらの数を集めて歌にそえ
贈らばや都の子らに

西班牙犬の家

（夢見ごこちになることのすきな人のための短編）

フラテ（犬の名）は急にかけだして、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところで私を待っている。この犬は非常にかしこい犬で、私の年来の友だちであるが、私の妻などはもちろん大多数の人間などよりよほどかしこい、と私は信じている。で、いつでも散歩に出るときには、きっとフラテを連れて出る。やつはときどき、思いもかけぬようなところへ自分をつれてゆく。で近ごろでは私は散歩といえば、自分でどこかへ行こうなどと考えずに、この犬の行くほうへだまってついて行くことにきめているようなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私はまだ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せてきょうはそこを歩こう。そこで私はそこを曲がる。その細い道はだらだらの坂道で、ときどきひどく曲がりくねっている。私はその道にそうて犬について——けしきを見るでもなく、考えるでもなく、ただぼんやりと空想にふけって歩く。ときどき、空をあおいで雲を見る。ひょいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花をつんで、自分の鼻の先でにおうてみる。なんという花だか知らないがいいにおいである。指でつまんでくるくるまわしながら歩く。するとフラテはなにかのひょうしにそれを見つけて、ちょっと立ちどまって、首をかしげて、私の目の中をのぞきこむ。それをほしいという顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちょっとかいでみて、なんだ、ビスケットじゃなかったのかと言いたげである。そうしてまた急にかけだす。

こんなふうにして私は二時間近くも歩いた。歩いてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com